本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、学校法人西野学園が実施した令和5年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

文部科学省委託事業
令和5年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

地域活性化のための農福連携人材育成事業

成果報告書

令和６年３月

学校法人西野学園

札幌心療福祉専門学校

目次

第 1 章　事業の概要
　第 1 節　　事業名
　第 2 節　　事業の概要
　第 3 節　　事業の実施期間
　第 4 節　　事業の推進体制

第 2 章　実施概要
　第 1 節　　実施経緯
　第 2 節　　実施体制図
　第 3 節　　会議議事録
　　第 1 項　　コンソーシアム会議
　　第 2 項　　カリキュラム会議

第 3 章　今年度の事業及び教育プログラムの内容
　第 1 節　　北海道余市紅志高等学校との連携（令和5年度）
　　第 1 項　　連携内容
　　第 2 項　　成果
　第 2 節　　札幌圏域の高等学校等との連携（令和5年度）
　　第 1 項　　連携内容
　　第 2 項　　成果
　第3節　　教育プログラムの開発
　　第 1 項　　実証講座の内容
　　第 2 項　　フィールドワーク（実習）の内容
　　第 3 項　　カゴメ野菜生活ファーム視察
　　第 4 項　　成果

第 4 章　全体の振り返り（時系列に記載）
　会議（ヒアリングなど）農林水産省北海道農政部事務所ホームページなど

第 5 章　　3年間のまとめ

第1章　事業の概要

第1節　　事業名

令和5年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

「地域活性化のための農福連携人材育成事業」

第２節　　事業の概要

・名称

『地域活性化のための農福連携人材育成事業』

・内容

(1)開発する高・専一貫の教育プログラムの全体像

社会福祉士と精神保健福祉士の養成校である本校では、近年多くの地方自治体で取り組みが進んでいる「農福連携事業」を学ぶことで障がい者や高齢者に対して、農業の知識を身に付けたソーシャルワーカーが相談業務を行うとともに農業作業のアドバイスをすることができる人材を育成することを目指している。その目的を達成するために、高校生の段階から、ソーシャルスキルや社会人基礎力を養い、福祉の基礎的な知識や考え方に少しずつ触れながら、専門学校へ進学後に現場での実習経験を積み、社会福祉主事や社会福祉士の資格取得を余裕のあるカリキュラムで目指す教育プログラムを構築する。この高専一貫プログラムで、進学後のミスマッチを避け、中途で退学する学生の減少にもつなげ、農福連携に取り組む地方自治体に就労することにより、若者の地域への定着と地域の活性化を図ることを目的にしている。

(2)新たな教育プログラムを開発する理由

新たな教育プログラムを開発する背景としては、以下の点が挙げられる。

①学習習慣を身に付ける環境がなかった学生がいる。

②それまでの学校生活が合わず、いわゆる「不登校経験」を持つ学生がいる。

③「社会的貢献ができる仕事に就きたい」という気持ちが強い。

④精神疾患や発達障害の診断を受けている学生がいる。

⑤他者とのコミュニケーション等に悩み、卒業後、国家試験受験に必要な実務経験１年を積むのに苦労する学生がいる。

⑥遠方からの入学者の内、地元に戻って就労する学生が少ない。

⑦専門学校が地域社会に関わる機会がこれまでの実践では少なかった。

⑧特別支援学校高等部を卒業した生徒の進学先が求められている。

様々な背景を持つ学生に対し、専任教員は教員自身のソーシャルワーカーという専門性を生かし、学生が卒業し就労していけるよう努力している。しかし、専門学校 3 年間だけで対応することは学生にとっても負担になっており、中途退学者や資格取得できない者もおり、現時点でも各学年 2 名ほどの休学者が存在している。これらの課題解決のためには、高等学校・特別支援学校・行政・企業の連携協力が必要である。

(3)開発する教育プログラムがどのような点で課題を解決することが可能であるのか。

上記のこれまでの教育内容では対応できない課題を次の 3 つに分類することができる。

A:地域活性化に取り組む高校との連携(①、②、③、⑥、⑦)

・農業実習を行う連携農園がある余市町唯一の公立高校と連携する。
〔北海道余市紅志高等学校(全日制総合学科)〕

・地元の余市町にもコンソーシアムに参加していただき、高専民公で地域活性化を目指す教育課程と企画を実行していく。

B:不登校・発達障がいに積極的に取り組んでいる高校との連携(①、②、③、④、⑤)

・本校に進学実績があり、農福連携ソーシャルワークコースへの入学希望者がいる。
〔市立札幌大通高等学校(定時制・午前午後夜の 3 部制)〕

・通級指導教室がある札幌市唯一の高校における専門学校教員による早期からの授業参加

C:高等支援学校との連携(①、②、③、④、⑤、⑧)

・高等支援学校には、発達に偏りがあるものの知的には高い生徒も在籍している。
〔北海道札幌あいの里高等支援学校 〕

これらの学校と高専一貫カリキュラムで連携することで、早い段階から SST(ソーシャルスキルトレーニング)や社会人基礎力の育成ができ、高専 6 年間または 7 年間の一貫教育で持続可能な社会に貢献する人材を育てることができる。

第 3 節　事業の実施期間

令和 5 年 6 月 21 日から令和 6 年 3 月 1 日まで

第 4 節　事業の推進体制

本事業の推進体制につきまして、四者によるコンソーシアムの構築と高等学校の連携協力校、行政機関の支援協力、企業の連携協力を含め 16 箇所との推進体制を整えた。

構成機関及び構成員

(1) 高等学校

名称		役割等	都道府県名
1	北海道余市紅志高等学校	コンソーシアム参加	北海道
2	市立札幌大通高等学校	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道余市養護学校	連携協力校	北海道
4	市立札幌豊明高等支援学校	連携協力校	北海道
5	市立札幌みなみの杜高等支援学校	連携協力校	北海道
6	北海道札幌あいの里高等支援学校	連携協力校	北海道

(2) 行政機関

名称		役割等	都道府県名
1	北海道余市町	コンソーシアム参加	北海道
2	北海道教育庁高校教育課	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道総務部学事課	支援協力	北海道
4	北海道農政部農業経営課	支援協力	北海道

(3) 専門学校

名称		役割等	都道府県名
1	学校法人西野学園　札幌心療福祉専門学校	コンソーシアム参加 プロジェクト代表校	北海道

(4) 企業

名称		役割等	都道府県名
1	特定非営利活動法人どりーむ・わーくす （就労継続支援B型事業所/水尻農園）	コンソーシアム参加	北海道
2	株式会社ネクストリソース	コンソーシアム参加	北海道
3	株式会社 dispo.（就労継続支援 B 型事業所）	コンソーシアム参加	北海道
4	カゴメ株式会社　東京本社	コンソーシアム参加	東京都

5	竹内農園	連携協力	北海道
6	吉岡農園	連携協力	北海道

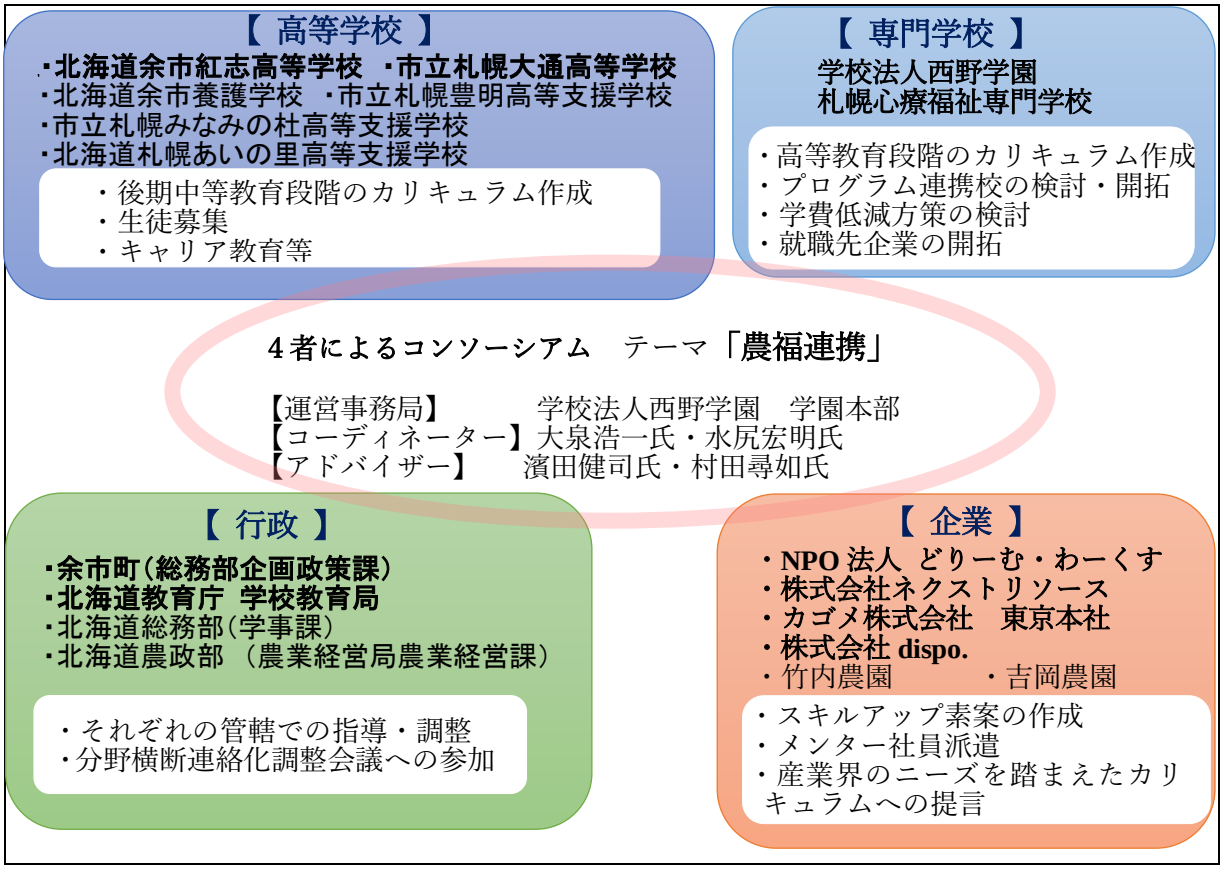
第２章　実施概要

第１節　実施経緯

・本事業では、令和5年7月～令和6年2月までに「コンソーシアム会議」「カリキュラム会議」を含む、関係機関との会議及び打ち合わせを行い、当該事業の目標達成のための体制整備や、具体的なプログラム開発を行った。

・「就業人口減少・高齢化」という課題を抱える農業界と、障がい者や高齢者の社会貢献の場の創出という課題を抱える福祉業界が連携することで、両業界の課題を解決するとともに、そのことによって地域の活性化を目指す取り組みである「農福連携」が国や各地方自治体等によって推進されているが、両業界が互いのことを知らないことで両者のマッチングが難しい現状にある。そのことから両業界の橋渡しができるコーディネーターの役割を担える人材の育成が求められており、福祉専門職養成校の立場から、「農福連携の知識や技術を持った」福祉専門職の育成を目指すための体制づくり、カリキュラム開発を行った。来年度以降も、より多くの農業関連団体や福祉関連団体、行政等を協力機関として迎え、より実効性の高いカリキュラム開発を行っていく予定。

第２節　実施体制図



第３節　会議議事録

第1項　コンソーシアム会議

第１回コンソーシアム会議　議事録

日　時：令和５年7月21日（火）15:00～16:50

場　所：学校法人西野学園　札幌医学技術福祉歯科専門学校　2Fコミュニティルーム

参加者：対面18名、web5名　計23名（詳細別紙）

司会進行：　岡積義雄（学校法人西野学園）

1.理事長あいさつ

前鼻英蔵（学校法人西野学園）

2.令和５年度の活動予定について

（1）連携授業について

1）余市紅志高校との連携について

佐藤誉匡（精神保健福祉科）

2）札幌圏域高校等との連携について

幡　直人（精神保健福祉科）

（2）農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラムについて

飯島英幸（精神保健福祉科）

上記、（1）（2）について別紙資料①②③を基に各担当者より説明がなされた.

3.コーディネーターから令和4年度の振り返りについて

（1）水尻氏コーディネーターから

前年度の取り組みは大きく分けて、札幌圏域連携授業の全体構成、農福商工連携と農福6次化のコーディネートおよび農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラム全体構成とそれぞれの科目の構成内容であった。

別紙資料④を基に説明がなされた。

（2）大泉氏コーディネーターから

前年度の取り組みは札幌圏域連携授業第2期の流通に関する部分、マルシェの開催に関する企画を実施した。今期はハーブティ作成販売と就労支援事業との関わりについて連携授業に取り入れる。

前年度、高校生への調査および事業への調査を実施したので報告する。

別紙資料⑤を基に説明がなされた。

また、道庁から依頼された農福連携に関するアンケートの結果（対象は市町村農政部・福祉部、市町村の農業団体・福祉事業所等）から農福連携教育を受けた人材の就労先について、行政職/保健福祉部門、就労支援事業所、農業団体等の意見がきかれた。これらの結果からも今後、行政機関との関わりが重要であることが示された。

（3）各務氏（北海道農政部農業経営課）

農福連携技術者支援研修は北海道初の試みとなった。協力に感謝する。これまでスタートアップ研修として基礎的な内容から現場で農福連携をおこなう専門人材の育成事業として行っている。修了試験に合格すれば、農水省認定の「農福連携技術支援者」として現場で認定される。

また、農福連携技術者支援研修の案内について別紙資料⑥とする。

4.参加団体から（敬称略）

…コンソーシアム会議参加団体からの意見

▹生田氏（北海道余市紅志高校　校長）
　連携高校として本事業に参画してきた。本高校としての成果を発表できる機会を望む。本校のコンセプトの一つ「安心して住み続けられる地域つくり」に「農業と福祉のジョイント」は欠かせない。連携授業での成果が生徒の満足感・自己肯定感を持ち、社会に出たときの自立心につながる循環に期待している。
▹三関氏（市立札幌大通高等学校　副校長）
　生徒には農福連携の言葉は理解しがたいが、生徒のキャリア形成・キャリア探求という形でプログラムを紹介、希望する生徒に参加を募っている。この事業の魅力は、新しい体験や共同して作業する事である。また、生徒のみならず教員が同じように興味を持つ事だと感じている。同じ経験を共有することが、共感をもって振り返りに代わるような取り組みを可能にしてくれると思う。

▹岩淵氏（北海道教育庁学校教育局高校教育課）
　余市紅志高校から有効な教育効果が得られているとの報告ありありがたい。総合的な探求科目の一つとして取り組んでいる成果である。探求は、自己で課題を見つける・情報収集する・分析する・表出するとなるが、それを実践するにふさわしいプランであると感じている。

…カリキュラム会議参加団体（連携校）からの意見
▹柏木氏（北海道余市養護学校　校長）
　地域支援の連携授業として参加している。この授業では、見える障がいと見えない障がいの違について触れた。手順書づくりを経験することで、障がい理解が、一人一人の障がい理解へつながることに期待している。

▹田中氏（市立札幌みなみの杜高等支援学校　校長）
　当校ではカフェもあり連携ファームで収穫された作物を加工して販売する取り組みを行っている。冬場作業をどのように組み立てるかの課題と合わせ６次化の観点から良いアイデアをもらっている。

▹小山氏（市立札幌豊明高等支援学校　校長）
　知的障がいが多い養護学校である。古くは農業科も併設していたが現在はほぼない。知的障がい者にとって農業は就労の場ではないとの判断があったのだろうと思う。あらためてこれまでの農業の発展をみたとき、障がいを持つ子供たちにも新たな可能性があると認識できた。
▹伊藤氏（北海道あいの里高等支援学校　校長）
　平取養護学校の勤務経験から町の産業課が中心となって養護学校との生徒と地域農家さんを結び付けた農福連携授業があった。本校、福祉サービス科があるが農業関連の学科はない。今後は色々な形で関わりが生まれてくると考える。農業系の職場は冬期間の業務が難しく、一般就労先は多くないと思っていた。今回様々な取り組みを聞く中で様々な可能性があると感じた。

▹七社氏（北海道農政部農業経営課）
　福祉側の課題や取り組みを知ることで今後の課題や施策の検討に活用させてもらいたい。

▹濱田氏（アドバイザー：東海大学　文理融合学部）
　農福連携を通して人材育成と教育の２つの側面からとらえることができる。
　農福連携は、農業が基盤となって就労だけではなく交流の場や教育の場やリハビリテーションの場といった多角的な側面を擁している。
　北海道の課題としては雪の問題が上がるが、農福商工連携は重要なキーとなる。北海道なりの農福連携の形があると思うので期待している。
　別件、９ 月に西日本を主体とした農福連携に関わる様々な人材が交流する機会を設けているので参加を募りたい。

5.次回予定について
　年末から1月に予定、あらためて事務局よりご連絡申し上げる。

～終了

（別紙）参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	リモート参加
〃	株式会社ネクストリソース	大泉　浩一	
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上　智史	
〃	北海道教育庁学校教育局	相馬　利幸	
〃	北海道余市紅志高等学校	生田　仁志	
〃　（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）	東海大学　文理融合学部経営学科	濱田　健司	リモート参加
カリキュラム会議	市立札幌みなみの杜高等支援学校	田中　進一	
〃	北海道余市養護学校	柏木　拓也	リモート参加
〃	市立札幌大通高等学校	三関　直樹	
〃	市立札幌豊明高等支援学校	小山　学	
協力機関	北海道農政部農業経営局	七社　貴郎	リモート参加
〃	北海道あいの里高等支援学校	伊藤　友紀	リモート参加
事業代表機関	学校法人西野学園	前鼻　英蔵	
事業責任者	〃	熊谷　修司	
事務担当者	〃	岡積、市川、万行、長井	
事業担当者	〃	飯島、佐藤、幡、酒井、山田	

令和4年度 第2回コンソーシアム会議 議事録

日　時：令和6年1月29日（月）15:00～16:30

場　所：学校法人西野学園　札幌医学技術福祉歯科専門学校　2Fコミュニティルーム

司会進行：　岡積義雄（学校法人西野学園）

出席者：対面 17 名、web　7 名、計 24 名（詳細別紙）

1.理事長あいさつ

前鼻英蔵（学校法人西野学園）

2.令和 5 年度の活動予定について

（1）連携授業について

1）余市紅志高校との連携について

佐藤誉匡（精神保健福祉科）

2）札幌圏域高校等との連携について

幡　直人（精神保健福祉科）

（2）農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラムについて

1）実証講座について

飯島英幸（精神保健福祉科）

2）カゴメ野菜生活ファーム視察について

酒井　啓　（精神保健福祉科）

上記、（1）（2）について別紙資料①②③④を基に各担当者より説明がなされた.

余市紅志高校との連携について授業回数を拡大できる余地はあるかの問いがなされ、現状の授業回数での実施にとどまるとの回答があった。

3.本校の取組と貴校との連携の位置づけについて

余市紅志高等学校　校長　生田仁志

上記について別紙資料⑤を基にスクールミッションからなる3つのポリシーと2つのコンソーシアムによる地域連携の説明がなされた。

▹熊谷校長

この2年間、本学と連携してくださったことに心より感謝申し上げる。単発のイベント的な連携ではなく教育課程内で連携できたことが大変ありがたい。高専接続授業を通し、学生が成長したのを実感している。お互いの教員の協力がこの連携には欠かせない。次年度もよろしくお願いしたい。

4.参加団体から（敬称略）

…コンソーシアム会議参加団体からの意見

▹三上氏（株式会社 dispo.）

弊社は就労者継続支援Ｂ型事業所を運営しており、今年度は「やっちゃば市場」に来ていただいた。徐々に BtoB 事業から BtoC 事業へ展開し商品の農福連携へとシフトしている。最新の情報提供として「タブロット」という会社の水耕栽培が、貴校の教室内で活用できるかもしれないと思う。

▹相馬氏（北海道教育庁学校教育局）

高等学校単体ではできない地域振興や地域活性など地域との連携に専修学校として連携協力した取り組みになっていることに大きな意味があり、今後も継続して実施してもらいたい。

▹生田氏（余市紅志高等学校）

前述のとおり、発言機会をいただいたので割愛する。

…カリキュラム会議参加団体（連携校）からの意見

▹柏木氏（余市養護学校）

本校においても生徒が地域に出る環境づくりの取り組みとなり、本校の重点教育目標である実際的・体験的な教育活動と大変強いつながりを持つ活動となった。特に同世代の交流や収獲体験は良い機会となった。今後、この経験により何が身についたのか校内で整理・評価していく。

▹前田氏（市立札幌大通高等学校）

本校ではこの農福連携授業で数名の生徒が参加している。キャリア教育の一環で１単位の取得が認められている。その参加生徒のレポートから一部紹介したい。この生徒は障害手帳をもっていてHR にも出席できなく通常の単位取得も困難で、いつも保健室にいる生徒である。この生徒には「こんな授業あるけどやってみようか？」と教員からの誘いで参加した生徒である。

レポートには、「農福連携授業で学び得られた自分が成長した点」として「自分自身が場違いである不安を感じつつも最後まで立ち向かえようになったこと」と書かれていた。

「今まで言葉選びで失敗して嫌われてしまったら

どうしようとの不安感から自分が頑張らなければならないと知らない人との人間関係づくりから逃げ続けてしまった。しかし、農福連携では失敗しても周りにいる大人が一緒にやれば大丈夫とサポートしてくれたことで大きく自信を持てた。その経験が人前で自分を出すことに対して今までのマイナスイメージが軽減されたように感じる。授業の中で専門学校生や先生方に助けられながら様々な共同作業を体験し、こんな自分でも周りの人の役に立つことができるのだと感じる事ができた。」と結ばれていた。私自身、このレポートを読み、通常の学びでは成し得ない保護者、教員以外の大人から学びを得られる効果に感謝する。この生徒が「大人って怖くないんだぁ」と感じる事ができたことはとても大きな変化である。

専門学校に興味を持つ生徒や地域福祉に興味を持つ生徒もいるので今後も続けて協力させていただきたい。

▹七社氏（北海道農政部農業経営局）

昨年7月に旭川において第1回農福連携技術者育成研修を実施、20 名が認定された。今週には、技術者派遣の仕組みづくりが行われ、市町村と農協、振興局を通じて福祉事務所に呼び掛けたところである。

▹伊藤氏（あいの里高等支援学校）

以前、平取に就任していた時の農福連携は町が主体となって学校と農家を結び付け、地場産業を押し出して展開していた。行政（自治体）が地場産業を上手く活用して行われていた。

前述、生田校長より力強いメッセージをいただいたが、地域創成や地学協働・地学連携を本校でも検討したい。

▹吉岡氏（吉岡農園）

年に１回程しか学生に伝えられる機会がない。農福連携について理解を深めるために、もっと回数を増やし、農福連携に関わる機会を増やすことが必要と感じるので検討をお願いする。

…アドバイザーから

▹村田氏（西野学園）

この高専接続での連携授業は強烈なアクティブラーニングだ。ノーマライゼーションのモデルケースと言って良い。これは精神保健福祉士・社会福祉士という資格をバックグランドにもっている心療校の教員の資質があってこそ成しえた素晴らしい実践である。教育委員会には、この実践のさらなる展開に力を貸していただきたい。すばらしい報告である。

▹濱田氏（東海大学　文理融合学部）

リモート参加者への音声の技術的トラブルがあり、会場内の様子が上手く聞き取れないので改善をお願いしたい。また、発表資料については後日送信してほしい。

本題に移るが、実際にやると効果があるのだなと実感した。

自身 20 年ほど農福連携に携わっているが、やはり目指すところは街づくり、街の中に障がい者が入っていく環境をつくることだと思っている。街づくりにみんなが入っていく。

最近、特別支援学校の取り組みが増えてきていて農福学校連携の位置づけとなっている。そのなかで専門学校での取り組みはチャレンジである。

学校教育の中ではやりきれない学習内容であり、社会の中で必要される人材とは何かという本質となるであろう。 今後の展開に期待する。

…コーディネーターから

▹水尻氏（コーディネーター）

カリキュラムをいかに作っていくかに重点してきた。今後はキャリア学、農福連携を学ぶことによって何に結びつくのか、あるいは地域活性に役立つのかについてカリキュラムとキャリアの結びつきに重点を置きたい。

・・・理事長より

改めてこの事業を具体的に推進出来るようにすることの意義を感じている。先の濱田先生の言葉にあるように地域の人を地域で育てるにはどうしたらいいのか、という観点は今後の少子高齢社会においては非常に重要な事である。CCRC の観点も含め、地域にとって最適な農福連携を確立することは、地域で育った人を地域で育てる事の循環を成立しないとならない。

小学校時代にそういう同級生がいたが、自分の無理解と関心の無さで対応出来なかった後悔をいまだに持っている。本法人にある幼稚園でも手のかかる子が毎年いるが、彼らの行く末を常に案じていても、妙案のないまま送り出している事に力の無さを感じていた。そのことをアドバイザーの濱田氏に話したところ農福連携についてヒントをもらった。幸い当法人は社会福祉士養成校を有していて農福（学校）連携を実践するにふさわしく、社会貢献として活用できないかとの思いだった。委託事業としては丁度半ば、今後も継続できるようにみなさまのご協力をお願いする。

5.次回予定について

年度開始から 7 月に開催予定、あらためて事務局よりご連絡申し上げる。

～終了

（別紙）参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	リモート参加
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上　智史	
〃	北海道教育庁学校教育局	相馬　利幸	
〃	北海道余市紅志高等学校	生田　仁志	
〃　（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）	東海大学　文理融合学部	濱田　健司	リモート参加
〃　（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）	学校法人西野学園	村田　尋如	
カリキュラム会議	北海道余市養護学校	柏木　拓也	リモート参加
〃	市立札幌大通高等学校	前田　有美子	
〃	北海道農政部農業経営局	七社　貴郎	リモート参加
〃	北海道あいの里高等支援学校	伊藤　友紀	リモート参加
連携協力	吉岡農園　いきいきファーム	吉岡　宏直	リモート参加
事業代表機関	学校法人西野学園	前鼻　英蔵	
事業責任者	〃	熊谷　修司	
事業担当者	〃	飯島、佐藤、幡、　酒井	
事務担当者（事務局）	〃	岡積、市川、万行、長井	

第 2 項　カリキュラム会議

<table>
<tr><td>会 議 名</td><td colspan="2">第1回　カリキュラム会議</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="2">令和5年9月　6日（水）　19 時 00 分　～　20 時 30 分</td></tr>
<tr><td>会　場</td><td colspan="2">札幌心療福祉専門学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">参 加 者</td><td rowspan="2">委　員</td><td>大泉　浩一（コーディネーター）
水尻　宏明（コーディネーター）
飯島　英幸（札幌心療福祉専門学校）
酒井　啓（札幌心療福祉専門学校）</td></tr>
<tr><td>参加者　4名</td></tr>
<tr><td>会 議
概 要</td><td colspan="2">1令和 5 年度のこれまでの振り返り
（1）農福連携の実際Ⅰ：全国的な先駆的な取り組みは学生も興味があり、継続していきたい。
（2）フィールドワークⅠ：振り返る時間等の必要があり、5 か所から 4 か所の方が良いと思われる。
（3）フィールドワーク演習Ⅰ　札幌圏域連携授業にて継続が良い。

2令和 6 年度のカリキュラムについて
3 年次に追加
（1）　農福連携の実際Ⅱ30 時間　前期 15 回
Ⅰは全国の優良事例、Ⅱは北海道の事例に触れる。案は元々30 回を企画していたので、どの様に絞って行くのかが課題。行政は必要であるのか、進路を見据えたカリキュラムとするのか、酪農、畑で絞るのか。

（2）　フィールドワークⅡ　210 時間　30 日間、視察 3 日間
5 月末から 7 月第 1 週の間
案はⅠで実習を終えたところを深める目的で考えていたが、どこか1か所に絞って、コーディネーター業務とジョブコーチ業務を深めることが目的として行う。竹内農園さんのところが良いか、恵庭市（ヨゴさんのところがお勧め）、道農協公社、が考えられる。あとは、評価の設計の仕方が課題となる。

（3）　農福連携を支えるプロフェッショナルたち　60 時間　通年 30 回
仕事の幅広さを知ってもらうため、女性向き、農福連携を目的とするのではなくて、幅広い職業選択や視野を養うことを目的とする。まずは誰に話を聞くかを検討する。職業の魅力が伝わるように、楽しい授業を目指す。野菜ソムリエ、ハーブ、シェフ、カゴメの企画等、ホクレン、富良野自立支援協議会、今金町地域振興（B型）、障害者</td></tr>
</table>

	スポーツとプロスポーツ、超福祉展、都市緑化プラネット、トレーナー、由仁、グリーンツーリズム、ハンター、ZOOM も使用して、全国的に考えていくこともあり得る。周りの人にも面白い人はいないかを確認してみても良いのでは、今後は授業の内容を考えることが課題。 （4）　農福連携に役立つ資格と知識　60 時間　通年 　資格試験は自分で受けるように紹介のみにするのか、2，3 つは必須にするのか、を検討する必要がある。簿記 3 級、食品衛生責任者は必須にすることが良いか。講師は資格学校の先生に依頼をするのがベター。事前に学生にリサーチをしてみることも必要、リサーチと就職キャリアを見据えて計画していく。 （5）　フィールドワーク演習Ⅱ　60 時間　通年　余市連携授業に読替 　特に検討事項なく、余市連携授業に読替継続。 （文責酒井　啓　）

<table>
<tr><td>会 議 名</td><td colspan="2">第2回 カリキュラム会議</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="2">令和5年10月 31日（火） 17 時 00 分 ～ 20 時 15 分</td></tr>
<tr><td>会 場</td><td colspan="2">札幌心療福祉専門学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">参 加 者</td><td rowspan="2">委 員</td><td>大泉 浩一（コーディネーター）
水尻 宏明（コーディネーター）
飯島 英幸（札幌心療福祉専門学校）
酒井 啓（札幌心療福祉専門学校）</td></tr>
<tr><td>参加者 4名</td></tr>
<tr><td>会 議
概 要</td><td colspan="2">1 令和 6 年度 2 年次
（1） 農福連携の実際Ⅰ 60 時間 通年 30 回
・千葉大学 吉田教授
・おおもり農園 大森一弘先生
・京丸園 鈴木 厚志先生
・三重県障がい者就農促進協議会 中野和代先生
三重県農業大学校 富所 康弘先生
・パーソナルダイバース 岩崎 諭先生
→さんさん山城の代わりに JA 岐阜はどうか
（2） フィールドワーク1 170 時間 22 日間
竹内農園
ペイフォワード
アグリコラ
やっちゃば市場
一ヶ所 3 日間
→さんさん山城ではなく、京丸園視察 3 日間
（3） フィールドワーク演習Ⅰ 通年60時間 札幌圏域連携授業に読替
→このまま継続

2 令和 6 年度 3 年次
（1） 農福連携の実際Ⅱ 30 時間 前期 15 回
北海道を中心に上から順に当たって依頼をかけてあたっていく。
学生のキャリアをイメージしてもらえるように依頼をかけていく。
候補：①美瑛町、②仁成ファーム、③恵庭市、④士別のノースリーフ等と順に声掛けを行っていく。</td></tr>
</table>

	(2)　フィールドワークⅡ　210時間（5月20日～7月12日の30日間、水木金） 竹内農園　3 日間×3 週　振り返り 3 日間 やっちゃば市場　3 日間×3 週　振り返り 3 日間　移動販売 京丸園視察　3 日間　　合計 27 日間 地域や行政との繋がりを意識した実習、コーディネーターとしてのプログラムをどのように組み立てるのか。恵庭市、北ひろしま福祉会竹内さんに聞く。 やっちゃば市場の繋がりは？三上さんに聞いてみる。市場をみてみる？ (3)　農福連携を支えるプロフェッショナルたち　60 時間　通年 30 回 ・JAバンク推進部　部長代理　濱口さん ・ランドスケープ、吉田さん ・富良野自立支援協議会、久田さん（心福卒業生） ・合同会社ファイングランド、柳谷さん ・ホクレン津田さん ・NPO法人のこたべ、平島さん ・農福商工連携、山本さん ・大塚ファーム、大塚さん ・デンソー山本さん →大泉さん中心に声掛けを行っていく。 (4)　資格 ・簿記 3 級 ・食品衛生責任者 ・販売士（リテールマーケティング）3 級 ・食生活アドバイザー ・ワインソムリエ ・フードマイスター ・美味安全野菜栽培士 ・調理師免許 ・食育アドバイザー ・フォークリフト ・ハンター ・罠 ・ドローン

	楽しく学びましょう。もしくは資格を取らせるのか。 農業自体の知識を学ぶってこともありかもしれない。 北海道農業の現状、農家の定義、農家の基礎知識について →柱について 簿記3級と食品衛生責任者とフードマイスターの3本の柱 食品衛生責任者の授業で行えるのか確認する。4コマ？ フードマイスター　昨年度は10月　スクーリングがある。12コマ？ 簿記3級　・・14コマ？ →来年度の学生の質を考えると、専任教員で対応をした方が良いのでは。 （文責酒井　啓　）

<table>
<tr><td>会 議 名</td><td colspan="2">令和５年度　第１回　カリキュラム会議（余市紅志高等学校等）　議事録</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="2">令和６年１月 19 日（金）　16 時 30 分　～　17 時 30 分</td></tr>
<tr><td>会　　場</td><td colspan="2">札幌心療福祉専門学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">参 加 者</td><td rowspan="2">委　員</td><td>余市紅志高等学校　太田先生、大野先生、山本先生
札幌心療福祉専門学校　佐藤先生、酒井</td></tr>
<tr><td>参加者　５名</td></tr>
<tr><td>会 議
概 要</td><td colspan="2">１　議題
（１）　令和６年度　連携授業の構想
①　札幌心療福祉専門学校のカリキュラムについて
・教育課程の説明、フィールドワーク演習Ⅱの授業を想定して余市紅志高校と連携し授業を行っていた。
・来年度は、希望者を募って学生を集めるのではなく、しっかりと授業として行っていけることが望ましい。
・そのため、この授業を高校生が受けたいという希望を基に本校の授業に参加していただくことが可能である。そうすることも連携と考えられる。
・農福連携の実際Ⅰでは農福連携の先駆者（5 名）に講師をしていただいた。先駆者の話を聞くことは高校生にとってもキャリア形成に繋がるのではないか。
・実習は５か所×3 日間、農福関連の事業所で実施していた。

②　余市紅志高等学校「地域資源活用」での連携授業の継続について
・単発的な授業を参加することを連携授業としても構わない。手順書づくりは継続してほしいという生田校長の思いがある。

③　その他、新たな単発含む可能な連携授業について
・90 分×30 回にこだわる必要はなく、回数は問わずやっていくことが可能。
・小幡先生との連携はどうなるのか。
・地域資源活用→地域園芸に名前が変更。
・本校で録画している農福連携の実際Ⅰをオンデマンドで活用することは可能。高校の「農福連携」とコラボすることは可能。</td></tr>
</table>

	（２） 今後の予定 ・心福の時間割が決まり次第、高校に伝える。 ・シラバス（シラバスを渡す）をみて、参加したい授業をすり合わせすることが可能。 ・地域園芸との連絡は、手順書作りを初め、山本先生を中心に連絡をとっていく。 ２　配布資料 ・別表第１（第９条関係）教育課程 ・令和５年度「農福連携の実際Ⅰ」授業内容 ３次回開催日時 ・高校のカリキュラムが固まり次第必要時開催する。 （文責酒井 啓）

第 3 章　今年度の事業及び教育プログラムの内容

第1節　　北海道余市紅志高等学校等との連携（令和 5 年度）

第 1 項　　連携内容

授業テーマ：出張型バリアフリー農園

授業回数：合計 10 回（高等学校の科目『総合的な探究の時間』
2 時間連続授業（100 分）で実施）

受講学生：高等学校生 5 名（3 年生）、専門学校生 2 名

<table>
<tr><th>月　日</th><th>授業内容</th><th>場所</th><th>授業担当（役割分担）</th></tr>
<tr><td>４月１８日
①</td><td>・授業の目的及び目標の確認、年間計画の作成</td><td>各校（オンライン連携）</td><td rowspan="5">札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名
余市紅志高等学校 教員 2 名</td></tr>
<tr><td>４月２５日
②</td><td>・施設見学、打合せ（農園の設置場所の確認、育てたい野菜の調査）</td><td>特別養護老人ホーム
フルーツ・シャトーよいち</td></tr>
<tr><td>５月　９日
③
５月１６日
④</td><td>・余市紅志高等学校農業科教員からの野菜、種植え、土づくりから収穫までの一連の流れなどに関する講義
・出張型バリアフリー農園の提案書の作成と共有
・土づくり
・種植え交流会の準備</td><td>余市紅志高等学校・農場</td></tr>
<tr><td>５月２３日
⑤</td><td>・種植え交流会（施設入所者：4 名、施設職員：4 名）</td><td>特別養護老人ホーム
フルーツ・シャトーよいち</td></tr>
<tr><td>５月３０日
⑥</td><td rowspan="2">・中間交流会と収穫祭に向けての準備
① 収穫した野菜の楽しみ方
→ 施設職員（栄養士、社会福祉士）との連携
② バリアフリー農園の先進事例の調査
→ 株式会社日比谷花壇</td><td>余市紅志高等学校</td><td rowspan="2">札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名
余市紅志高等学校 教員 1 名</td></tr>
<tr><td>６月１３日
⑦</td><td>各校（オンライン連携）</td></tr>
</table>

	（東京都）への質問内容の検討 ③ 当日の進行、役割分担 ④ 中間交流会時に行う入所者及び職員に対するアンケート作成		
7月１８日 ⑧	・中間交流会（施設入所者：4名、施設職員：4名） ～ 大根の収穫、ふろふき大根と浅漬けの調理、アンケート実施	特別養護老人ホーム フルーツ･シャトーよいち	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 2 名
9月　1日 ⑨	・株式会社日比谷花壇への活動報告及び質問 → 学生へのアドバイス ・中間交流会アンケート集計結果の共有	各校（オンライン連携）	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名
9月１２日 ⑩	・収穫祭（施設入所者：5 名、施設職員：4 名、ボランティア：2 名） ～ じゃがいもと人参の収穫、いも餅とじゃがバターの調理	特別養護老人ホーム フルーツ･シャトーよいち	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 2 名

※ 作物への水やりや除草等の管理に関しては、入所者、施設職員、また定期的に高校生が訪問し作物の生育状態の確認と共に実施。

入所者･余市紅志高等学校生
専門学校生の集合写真

水やりの様子

雑草の除草中の様子

収穫祭の様子

授業テーマ:余市養護学校生を招いてミニトマトを収穫する際の手順書作成
授業回数:合計 5 回(高等学校の科目『地域資源活用』
2 時間連続授業(100 分)で実施)
受講学生:高等学校生 10 名(3 年生)、専門学校生 3 名

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
４月２１日 ①	・授業の目的及び目標の確認 ・農福連携ガイダンス ① 障害者の理解について 講師：北海道余市養護学校　教諭 小幡 史門 先生 ② 手順書の作成と細分化の基礎的な理解 講師：札幌心療福祉専門学校　教員 佐藤 誉匡 ・手順書作成を開始 ※ 適宜、進捗状況に関し教員間で連絡を取り合い確認	余市紅志高等学校	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名 余市養護学校 教員 1 名
７月１４日 ② ７月２１日 ③	・高校生が作成した手順書を活用した収穫体験 → 手順書の使いやすさについての考察と修正	余市紅志高等学校・農場	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校

９月１５日 ④	・収穫体験会の準備（進行、役割分担、手順書の最終調整）		教員 1 名
９月２１日 ⑤	・収穫体験（余市養護学校生：11 名、余市養護学校教員：7 名） ～ 手順書を活用したミニトマトの収穫（道具準備、収穫、パック詰め） ・体験後の振り返り		札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名 余市養護学校 教員 1 名

手順書づくりのための講義

手順書づくり

手順書の使いやすさについて考察

余市養護学校生が手順書通りに収穫

余市紅志高等学校生、余市養護学校生、専門学校生の集合写真

第２項　成果

今年度は、連携授業の高等学校の科目を１科目増やし、昨年度同様『総合的な探究の時間』の他に『地域資源活用』の科目で実施した。連携授業開始前に高等学校の教員と授業の目的及びスケジューリング等に関し密に連絡を取り合い共有したことにより、特別支障なくスムーズに開始することができた。また、下記の目標を掲げ授業を展開した。

① 本授業に参加した高等学校生および専門学校生の成長

・課題を発見し、解決する力を身に付け向上する。

・各学校生や施設職員及び入所者などとの交流、失敗や成功体験を通して、相手に対して自分の考えを分かりやすく伝えるコミュニケーション能力、及び協調性を向上する。

・計画性を高め、いつまでに何をどのような形にしていなければならないのか見通しを持ち、自主的に行動できるようになる。

・自分のできることを粘り強く取り組もうとする使命感や責任感を高め、積極的に行動できるようになる。

・地域の現状とニーズを理解し、地域貢献や地域の活性化について考えることができるようになる。

・「農福連携」を軸とした共生社会の実現に向けての課題抽出と、必要とされる取り組みを提案する力を培う。

・「農福連携」の多様性について、自主的に考察できるようになる。

② 本授業に参加した高等学校生が福祉に関心を持ち、本校への入学や専門職を目指す者が現れること。

・専門学校生との直接的な関りにより、高校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深める。

①に関して、出張型バリアフリー農園（特別養護老人ホームの中庭にバリアフリー農園を造園し、種植え体験や収穫祭を実施）と手順書作成（ミニトマト収穫の手順書を作成し、養護学校生を招いて手順書を使用した収穫体験会を実施）の連携授業を通して、高等学校生及び専門学校生の成長が十分にうかがえた。特に施設職員や入所者、養護学校生との関りから、他者に分かりやすく話すコミュニケーション能力や協調性が向上された。また、各イベントの実施に向けて計画性や課題解決の意識が高まり、使命感や責任感を持って取り組むことができていた。同時に、高齢者や障害者の理解が深まったことにより、相手の立場になって多様な角度から物事を考える力が向上され、地域貢献や共生社会の実現に関して考えることができるようになった。

②に関して、本校への入学には至らなかったが、高校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深め進路選択することができていたように感じる。

昨年度の課題であった専門学校生の疲労の増大（毎週片道、約 1 時間のバス移動）により参加学生を固定化できなかった点に関しては、オンライン授業を活用し改善することができた。教員間においては、昨年度の実績もあり良好な関係性を保ち各自、臨機応援に対応しつつ共通認識を持って授業展開することができた。今年度は高等学校の 2 つの科目で連携授業を実施したことにより、新たに余市養護学校を招いた 3 校での連携を成すことができ、農福連携を大きなテーマにして高齢者と障害者の 2 つの分野で当事者との直接的な交流から学びを深めることができたことは大きな成果だと考える。

次年度は、手順書作成（作業の細分化）をテーマに掲げた余市紅志高等学校と余市養護学校との 3 校連携授業を継続する運びとなっている。その他に高等学校の希望に合わせて本校で実施している農福連携に関する授業を配信し、オンラインによる連携授業を拡充する計画で進めている。

第 2 節　札幌圏域の高等学校等との連携（令和 5 年度）

第 1 項　連携内容

授業テーマ：農業の栽培から収穫、加工、販売までの流れを体験するとともに、各工程において誰もが力を発揮できる環境を整える視点を養う

授業回数：合計 8 回（市立札幌大通高等学校は「キャリア探求」の科目として単位認定を行う）

受講学生：市立札幌大通高等学校生 2～5 名、社会人 1～2 名、
札幌市立星友館中学校（公立夜間中学）生 2～4 名、本専門学校生 1 名

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
5月２７日	・オリエンテーション ・演劇ワークショップ	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 北海道演劇財団　演出家１名

６月１０日	・農作業体験（畑作業） ・農作業の細分化と各参加者とのマッチング	農場	札幌心療福祉専門学校 教員２名 合同会社竹内農園　代表社員１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
７月１日	・企業による農福連携の展開 ・ハーブについての講義 ・ハーブティー作りと試飲会	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社アット・ボタニカル代表取締役（ハーブスペシャリスト）１名 シミックホールディングス株式会社　CEO オフィス　生薬事業部　社員１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
７月２２日	・野菜の流通について ・マルシェのチラシ作り	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社感動いちば　営業部兼　商品課　課長代理１名 株式会社ネクストリソース代表１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
９月２日	・トマト収穫体験 ・利益の出し方と、労働者（障害者等）への工賃の関係について ・商品販売の基礎知識について ・魅力的な売り場づくり（ＰＯＰなど）	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社ネクストリソース代表１名 NPO 法人どりーむ・わーくす理事長１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
９月９日	・農福マルシェの開催（赤い羽根共同募金ブースも併設）	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員４名

			株式会社ネクストリソース代表１名 札幌市中央区社会福祉協議会職員２名 市立札幌大通高等学校　教員１名
１１月１１日	・農福商工連携について （ナショナルブランドと連携する事例について） ・農福商工連携による地域活性化について	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 NPO 法人どりーむ・わーくす理事長１名 株式会社カゴメ　社員２名
１２月２日	・農福連携の６次化について （６次化の実践者からの講義、パスタを作って食べる）	札幌医学技術福祉歯科専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員３名 NPO 法人どりーむ・わーくす理事長１名 株式会社ネクストリソース代表１名 Pay forward　職員１名 ペルル（飲食店）　店長１名 市立札幌大通高等学校　教員１名

第２項　成果

各授業終了時に振り返りを兼ねた学生・生徒へのアンケート及びインタビュー、教員からの観察で見えてきた成果について、市立札幌大通高等学校の生徒については、①コミュニケーションの経験値蓄積、②福祉に関する理解・興味の向上、③「大人」や「仕事」に対する好印象の獲得、④自己有用感の向上などが認められた。

本校、札幌心療福祉専門学校の学生については、⑤モチベーションの向上が認められた。

以下、それぞれの成果について詳細を記載する。

①コミュニケーション経験値の蓄積

本連携授業については、全 8 回の構成となっているが、高校生は基本的に毎回の単発での参加も可能という形となっている。

その中でも体調不良等を除きほぼ全ての授業に参加した生徒の中には、初回の頃とは違う様子が見られた生徒がいた。単に本授業に関わる人間に慣れてきたという部分も大きいとは思うが、高校教員から聞く普段の高校の様子も含めて考えると、全般的に「積極性の向上（自分から進んで自分の意見を言う、自分から他者に話しかけるなど）」が認められた部分が大きかった。

授業後アンケートで「一番頑張ったこと」として「（グループワークの中で）隣の人とまず話してみること」「皆の社交術を学んだ」「思った事や考えを言葉に出した」「ラフに話して良かったと実感できた」「思ったように意見できた」「意見を出し合って掘り下げていくのは初めてだったけど、面白かった」等の記載があった。

本校教員や高校教員から見ても、高校生らが座学の中やグループワークの中で自発的に発言するようになっていった印象を共通して持った。

今年度当初は、相手と目線も合わず声も小さかった生徒が、最終回では講師から「何か質問ある人はいる？」という問いかけに対して自分から手を挙げて質問をするまでになっていた。

さらに、最終回の授業最後に、本連携授業全体の感想を聞いた際には、周りに多くの大人がいる中で、「同じ高校の先輩や OB（本校学生）、多くの大人の方たちと色々とお話ができて本当に良い経験になった。なかなか得られる経験ではなかった」と堂々と話している様子が見られた。

②福祉に関する理解・興味の向上

毎回の授業後アンケートにて、「授業前」と「授業後」の「福祉についてもっとしりたい」度合を 0～10 の 11 段階評価で回答してもらった結果をまとめたのが下記のグラフである。

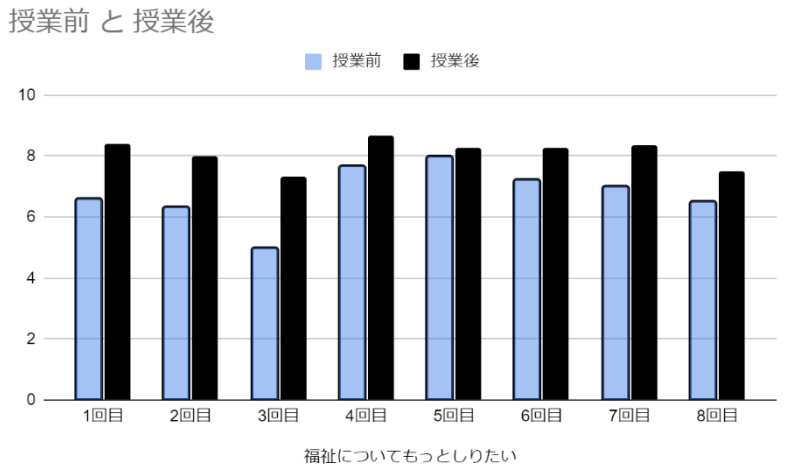
1 回目から 8 回目に至る全ての回において、授業前より授業後の方が「福祉についてもっと知りたい」という数値が高い。

本連携授業については、高校の掲示版のチラシ、本校教員の高校における授業説明会などにおいて内容に興味を持った生徒が参加するのが基本であるが、今年度の参加者においては始めから福祉について興味がある生徒はむしろ少なかった。

本連携授業全 8 回のうちの 1 回目は、ノンバーバルコミュニケーションの学習や、本連携授業参加者の凝集性向上を目的として演劇ワークショップを取り入れているが、むしろ「演劇」自体に興味があって参加した生徒が多かった。

また、高校教員からの参加奨励や本学学生と直接の知人関係にあり、同学生から誘われたことが大きな参加動機となっている生徒もいた。

上記状況の中、演劇に関する授業は初回のみだったにも関わらず、その後も参加を継続した生徒が多く、最後の授業時には「福祉に元々興味はなかったが、もしかしたら将来の仕事としても良いかもしれない」「誰もが自分の力を発揮できる環境づくりの大切さが分かった」などの発言も聞かれ、福祉に対する興味や理解が進んだ様子が見られた。



③「大人」や「仕事」に対する好印象の獲得

今年度の本連携授業では、昨年度とは違い一般社会人や公立夜間中学の生徒らの参加も募った経緯もあり、専門学生だけでなくより幅広い年齢層の参加者が一緒に一つのワークを行う場面が多かった。その中で高校生らが年上の人たちと接して参考にしたいと思った点について「グループ内で役割を決める際に、リーダーシップを発揮して、皆が強みを発揮できるように役割を決められていた所」「大人の余裕がある所。話し合いの最中、困った時に意見を整理してくれた。また、礼儀もちゃんとしつつ、フレンドリーに会話ができているところ」「メリハリがすごい」「棒立ちせず、とりあえず動く、見せるところ」「大人が自由だったから自由にできた」「大人が笑いながらわくわくドキドキしていた。笑顔が良かった」などの意見があった。

大人と対等にグループワークを楽しく行う中で、周りの「大人」に対する印象、自分が「大人」になっていくことに対するイメージがより良いものに変化した部分があるように見受けられる。

さらには「大人って働くことに対してマイナスイメージを発信してたけど、今日の話を聞いて印象が変わった」など、毎回の授業で各プロの講師に、それぞれが信念を持って楽しく仕事をしている様子に触れ、「仕事をする」ということがただお金を稼ぐために仕方なくやるものではなく、前向きに楽しくやるものだということを学んだという意見もあった。

④自己有用感の向上

ある生徒は、マルシェ準備のための POP づくりを担当した際、イラストや文字を分かりやすく、見やすくデザインすることに力を発揮した。その力を講師や教員だけでなく、他参加者からも褒められ、頼られることによって、非常に前向きに自分の力を発揮するようになった印象がある。

その頃から POP 作りだけでなく、グループワーク等でも自分の意見を発信する場面を多く見かけるようにもなった。その都度、講師等もその意見を議論に取り入れるなどしたこともあって「大人がこんなにも自分の意見を聞いてくれるのかと感じた」という発言もあった。

自分が力を発揮して周りの人に貢献できること、貢献できると自分もうれしいことなど、まさにこの授業のテーマを自身の体験をもって学んで貰えたと考える。

上記はたまたま一人の生徒について取り上げたが、その他の生徒についても各々の得意な点などを見つけてもらいつつ、自分の力を発揮したと実感を持ってもらえたと考えている。

実際、毎回の授業後のインタビューで「自分が力を発揮したこと。頑張ったこと」について尋ねると、「土曜日の朝から教室に遅刻せずに来たこと」や「皆で完成にもっていったこと」「人の話を真面目に聞くこと」など、それぞれの立場で頑張ったことを述べている。

「できて当たり前」や「なぜこれができない」と言われることが多いと、どうしても前向きになれない場合も、まずは自分のできることを頑張って、それが周りの人にも認められるという体験をしてもらえたことは有意義だったと考える。

⑤モチベーションの向上

本校の中での本連携授業の位置づけは、「農福連携ソーシャルワークコース」というコースの中の一つの授業というものである。本校本学科では「精神保健福祉コース」と上記コースの二つのコースがあり、入学後 2 年次進級時から学生はどちらかのコースを選択し、進むこととなる。

つまり 2 年次に「農福連携ソーシャルワークコース」を選択した学生のみが本連携授業を受講するという形となる。

そして今年度「農福連携ソーシャルワークコース」を選択した学生は一人しかおらず、よって、本連携授業も専門学生は一人のみという状況であった。

さらに、この一人の本校学生は農福連携とは別の、社会福祉士の国家試験授業に関わる実習における失敗体験等などから、「農福連携」や「連携授業」に対してというよりは、本校での学生生活全般へのモチベーションが低下する時期もあった。

しかしながら本連携授業において高校生らと接する中で、高校生らから頼りにされ、褒められる体験をすることで、「楽しかった」と話し、前向きに参加するようになっていった。

そういった意味では④でも述べた自己有用感の向上が、高校生だけでなく、専門学生にとっても良い影響を及ぼしたと考えることができる。

以上の大きく 5 点が、本札幌圏域連携授業での成果である。

第3節　教育プログラムの開発

第 1 項　実証講座の内容

「農福連携の実際Ⅰ」の科目において3回実施する。

第1回目　7月11日（火）　京丸園　鈴木　厚志先生

参加者　釧路総合振興局農務課　1名　　ホクレン　1名　　農業者　1名

第2回　　9月　5日（火）　三重県障がい者就農促進協議会　中野和代先生

三重県農業大学校　副校長　富所　康弘先生

参加者　北海道農政部2名　ホクレン　1名　　日経BP　4名　農業者　1名

第3回　　11月　7日（火）　パーソルダイバース株式会社　神奈川事業部

よこすか・みうら岬工房　マネジャー　岩﨑　諭史先生

参加者　北海道農政部2名　ホクレン　1名　　農業者　1名

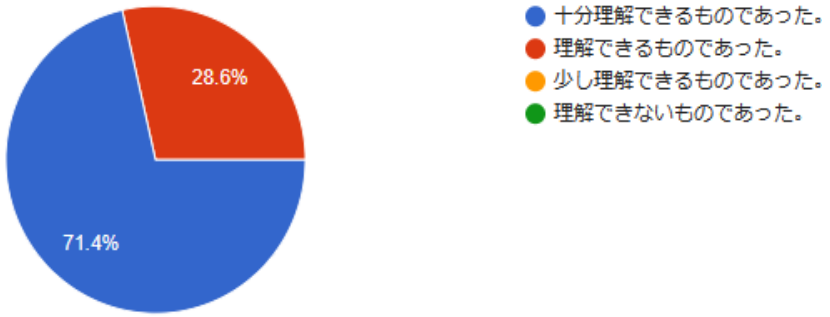
その他に　千葉大学　教授　吉田　行郷先生　おおもり農園　大森　一弘先生

さんさん山城の新免　修先生から講義をしていただく。

アンケートは3回の講義の参加者の述べ人数の11名の内、7名の方から回答をいただいた。

1　講義の内容について当てはまるものを選んでください。

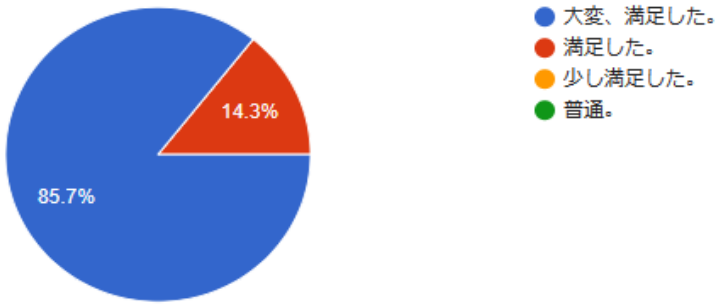
7 件の回答



講義の内容について「十分理解できるものであった」が71．4％、「理解できるものであった」が28．6％であった。このことから講義内容としては理解できるものであった。実際にどのようして農福連携に取り組まれていることを中心の内容であった。

2　講師の教え方について当てはまるものを選んでください。

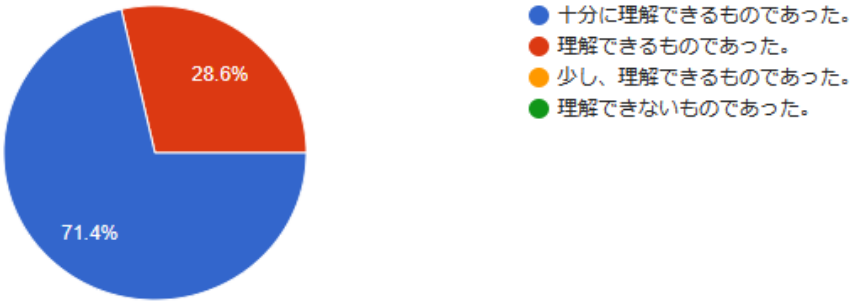
7 件の回答



講師の教え方については「大変、満足した」が85．7％、「満足した」が14．3％であった。
このことから分かりやすい講義であったことが理解できる。パワーポイントを活用し資料を元に講義が進められていた。

３　資料の内容について当てはまるものを選んでください。

7 件の回答

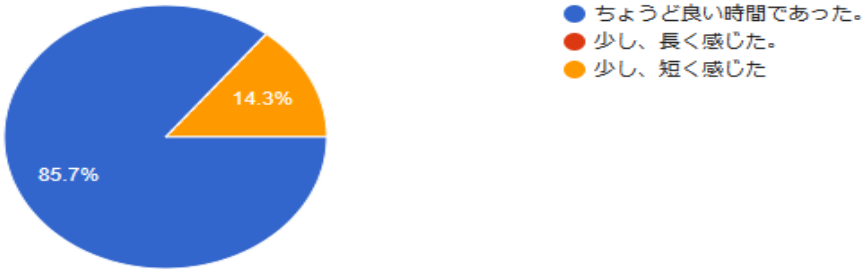


資料内容について「十分に理解できるものであった」が71．4％、「理解できるものであった」が28．6％であった。講義はパワーポイントを活用し進めていくのが中心であり、取り組まれている実際の内容がわかる動画も活用し、さらに講義内容を理解するものとして有効活用されていた。

このことから資料についても理解しやすいものなっていることが分かる。

４　講義の時間の長さについて当てはまるものを選んでください。

7 件の回答

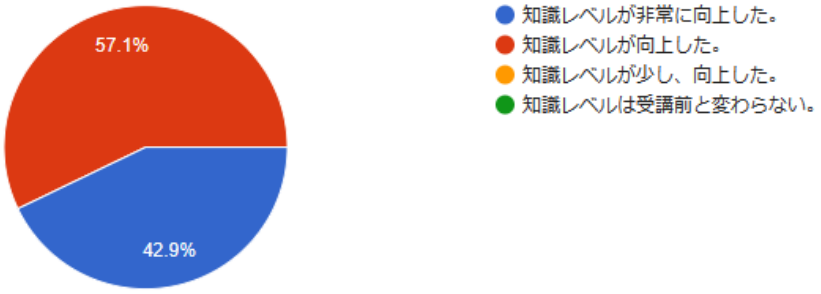


講義の時間の長さについて「ちょうど良い時間であった」が85．7％、「少し短く感じた」が14．3％であった。このとから講義の時間もちょうど良い時間であったことが理解できる。講義は70分程度を行い、質疑応答が15分程度、アンケートを5分の合計90分。

講師の方も事前に70分程度の時間に終了できるよう準備していただき、毎回、延長することがなく終了できている。

5　実証講座を受ける前と比べて知識レベルの変化について当てはまるものを選んでください。

7 件の回答



実証講座を受ける前と比べて知識レベルの変化について「知識レベルが向上した」57．1％、「知識レベルが非常に向上した」が42．9％であった。このことからこの講義を受けることにより農福連携に関する知識が向上したことが分かる。

アンケートの自由記述からのコメントは下記になります。

・鈴木取締役の素晴らしい取り組みを拝聴でき、非常に参考になりました。

・農業と福祉のそれぞれの強み、弱みを活かす考え方や実践がとてもわかりやすく勉強になりました。ありがとうございました。

・とても勉強になりました。

・ノウフクの取り組みにおける障壁を乗り越えるための様々な工夫がよく分かった。

・農福連携先進地である三重県のお話大変勉強になりました。ジョブトレーナーやコーディネーターなど人材育成制度が確立しているところが素晴らしいと思いました。ぜひまた教えていただきたく思います。

・特例子会社の農作業受託の事例はないことから大変勉強になりました。

・具体的な事例紹介が多く、興味深い講義でした。

まとめ

今回、2年次の「農福連携の実際Ⅰ」を実証講座として実施した。アンケート結果からこの授業が農福連携を理解する内容として有効であると理解することができた。今後は「農福連携の実際Ⅱ」のカリキュラムについて構築を行う。

第２項　フィールドワーク（実習）の内容

科目のねらい

農福連携の実際を現場で体験することにより、農福連携の全体像を理解するとともに、農福連携を推進する人材となるために必要な基礎知識・技術・ノウハウを修得します。

①野菜栽培における農福連携
②果樹栽培における農福連携
③畜産における農福連携
④農産物流通における農福連携
⑤農福商工連携（北海道外の場合もあります）
⑥農福の6次化

実習先と実習の日程

・竹内農園　5月23日、30日、6月6日
・畑とキッチン　6月27日　7月4日　8月1日
・ペイフォワード　7月18日、25日、9月12日
・アグリコラ　　9月19日、11月14日、
・やっちゃば　　11月28日

竹内農園の実習

アグリコラの実習

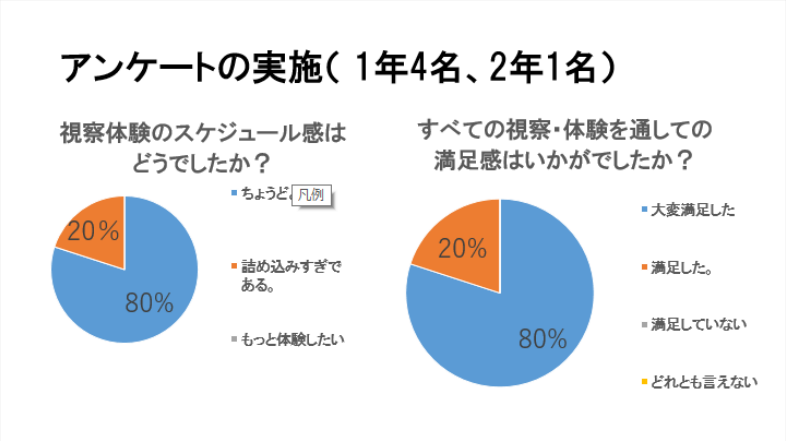
やっちゃば市場の実習

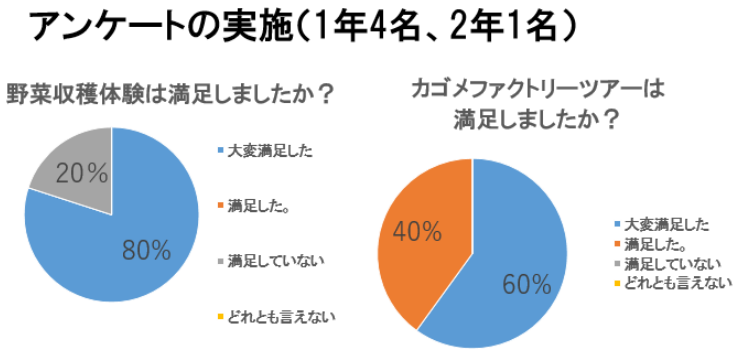
第 3 項　カゴメ野菜生活ファーム視察

1、目的
「農福連携」において全国で取り組まれている先行実践事例での視察を行い、福祉的な視点で農業経営に関われる人材として必要な視点を習得する。また、興味関心が深まり、学習意欲の向上を図ることとする。

2、スケジュール・視察内容（1 年 4 名、2 年 1 名、引率教員 2 名）
8 月 9 日（水）　移動日
8 月 10 日（木）
10:30～　野菜生活ファームの概要の説明
11:00～　トマトの収穫体験の実施
13:30～　カゴメファクトリーツアーの実施
15:00　　終了
　8月11日（金）　移動日

3、アンケートの実施（対象参加学生 5 名、5 名回収）結果





全体的に視察に関しては、満足したという回答が多かった。スケジュール感も概ね問題なくちょうど良いと感じている様子であった。

4, レポート課題の実施、結果（全文 pp.3 を参照）
回収したレポート 4 人に共通して言えることは、
・収穫体験を通して、「収穫の楽しさ」を学んだ。
・地域と連携して、取り組みを知ってもらう機会を作ることの大切さ。
・農業～加工～販売を通して、多様な機会を設けることができ障害者等の活躍する機会を生むことができる。
・クラスメイト同志の絆が深まって、学習に対する意欲が高まった。

5、まとめ
以上の結果から、実際に体験することで、ソーシャルワーカーという立場からどのように農業に関わっていくのか、農福連携とは何かを考えるきっかけとなっていることが伺える。また、クラスメイト

同士の関係性が深まり、学習に対する意欲が高まった様子も伺える。目的を十分達成する経験が出来ていると考えることができたため、今後もこのような機会が継続できることが望ましいと思われる。

氏名	野菜収穫体験を通して学んだことはなんですか？ソーシャルワーカーとして大切にするべき視点や価値等について考えてみて下さい。 （200文字以上）	ファクトリーツアーを通して学んだことはなんですか？ソーシャルワーカーとして大切にするべき視点や価値等について考えてみて下さい。（200文字以上）	全体を通して学んだことはなんですか？ （200文字以上）
Aさん	収穫の楽しさを学びました。福祉と連携した時、大切にするべき視点は障がい者の方が楽しく農業に関われるかだと思いました。 野菜の収穫はそれぞれ収穫の仕方が違かったり、大きな野菜が採れた時はとても嬉しくなります。なので、楽しさややりがいを感じると農業の仕事を長く続けられるのかなと思いました。 1次産業の農産物の生産では、普通に野菜を作るだけでなく肥料の量を変えたりして野菜の成長の違いを見たりして勉強をすることも出来るのでやってみるのもいいと思いました。 その野菜で何かを作ってみて、どの野菜が1番合うかなど検討するのもいいかもしれません。（2次産業）	KAGOMEのジュースは種類も沢山あるし、製造工程は沢山あるんだろうな、人も沢山居るんだろうなと思いました。でも製造工程を見ると、中には人が少なく無人の機械があったり、ほぼ機械で驚きました。でも他の所でたくさんの人が働いてることを知りました。 野菜の生産からのジュースの製造、販売までの過程で大切にするべき事は障害の度合いによって得意、不得意な事があるのでそれに配慮した事をすることだと思いました。 でも、出来ないことに挑戦するのも自分の出来る仕事を増やせるいい機会だと思いました。	六次産業は大変という事を学びました。 今ひまわり畑の所は元々水田で、水を抜くのに時間がとてもかかること。 今もまだ畑の下の方は水っぽいらしく、後どのくらい時間がかかるのか気になりました。 トマトの種類も沢山あり、KAGOMEだけの品種やそれ以外でも7500種類あると聞いてとても驚きました。 それ以外にも野菜は沢山育てているし、野菜ジュースに入っている野菜の量や種類を知ることができ、とても勉強になりました。 自分は好き嫌いが多くて、野菜を食べる事が少ないのでこれからは健康に気をつけて野菜を沢山食べようと思うことが出来ました。 もし、野菜の収穫や加工、販売まで福祉と連携したら、障がい者の方はどんなことが出来るだろう。と考える事も多かったです。 来年も行くなら、今よりもっと深く農福連携について考えられるようになりたいです。
Bさん	私が野菜収穫体験を通して学んだ事は、KAGOME野菜生活Farmで働いている職員の方々もソーシャルワーカーと同様に消費者（クライエント）に“共感”し、“あたたかみ”を持ち、“誠実”に向き合っているという事です。 私は自分自身が持ち帰る分のミニトマトを収穫した後、後々合流する事になっていた酒井先生の分のミニトマトを収穫しました。その時、私は「酒井先生に喜んでほしい」「より美味しいミニトマトを選びたい」と考えていました。 この瞬間、私は少しの間だけ職員の方々の立場になれたように感じました。自分達が育てたミニトマトを食べる消費者の喜ぶ顔が見たいという“あたたかみ”、品質の良さに拘る“誠実”さ。そして、そのような農園で働く職員に寄せられているであろう信念を貫く“共感”性。 以上が、職員の方々と私が目指すソーシャルワーカーに共通する大切にすべき視点や価値であると推察します。	私がファクトリーツアーを通して学んだ事は、KAGOME野菜生活Farmで働いている職員の方々もソーシャルワーカーと同様に消費者（クライエント）の信頼を得る為に緻密な工夫を凝らしているという事です。 一目で企業努力が伝わるような展示や当事者である職員の方々からのリアルな声と説明、消費者であるツアー参加者（主に子ども達）が最後まで飽きる事なく楽しめるようにと考えられたコンセプトやタブレットの使用方法など、約七十分間に様々な資源の活用が見られました。 ソーシャルワーカーもクライエントの支援の際に多様な社会資源や制度を利用する為、以上がKAGOMEの発展に関わる職員の方々と私が目指すソーシャルワーカーに共通する大切にすべき視点や価値であると推察します。	私がKAGOME野菜生活Farmへの視察全体を通して学んだ事は、様々な業種と連携する為に大切な考え方は私達を取り巻く環境を如何に地域が抱える社会問題を解決させる為に作用させられるかであるという事です。 KAGOME野菜生活Farmは農業、工業、観光と連携しています。農業では地形、天候、生物等。工業では知識と技術の共有、効率化、衛生等。観光では関係の構築、楽しさ、明確化等の課題に直面します。そのような状況に対して職員の方々は自然との共生、日本中・世界中との密な関わり合い、地域住民の協力を得る為の機会の創出を始めとした多様な策を講じました。私は、このような努力が今や国民的企業となったKAGOMEを作ったのではないかと考察します。 ソーシャルワーカーには、常に人と環境との相互作用を意識する必要があります。私はこの経験を通じて、クライエントが抱える問題を解決する為にはそのような専門職としての意識と連携が重要である事を再認識しました。夏休みが明け、実習に取り組む際には以上の二つを特に重要視しながら努力を重ねていきたいと思います。 今回はこのような貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。

Cさん	まず、収穫体験の前に職員さんが、水田を畑にするために土壌の改良の為にひまわりを植えている話をしてくれました。5年かけても粘土層を使える畑にするのは難しい、などのお話を聞いて、農業の難しさを学べました。その後に、1年間を通じた食育を進めているという話と、地域と一緒になって小学生、障害者、高齢者などと一緒に収穫体験をしたり就労支援もしている話を聞いて、とても興味がわきました。やはり、授業で何度も聞かされているように、地域との連携というのはとても大切な事なんだなと再確認することが出来ました。その後、ミニトマトの収穫をしたのですが、小さい力でも簡単に取れたので、他にも身体に不自由があっても収穫しやすい野菜とかがあるのか興味がわきました。	まず、とても小さい子供から普通の大人まで見学をしていた事に驚きました。実際、子供にも分かりやすく、私たち学生の視点から見ても退屈になるような事はなく、非常に勉強になるファクトリーツアーでとても満足しました。ソーシャルワーカー視点から見ると、野菜ジュースの製造の過程を配布されたタブレットで見せてもらったのですが、足が不自由だったりで自由に移動しずらい方でも手元で映像を見て一緒に学べるので、とても良いと思いました。映像には飽きさせない工夫もあり、非常に良い体験が出来ました。	まず、3日間のうち2日がほぼ移動で、自分は時間に余裕を持って行動するのが苦手だったので、この実習で少しは時間管理の大切さや方法を学べて成長出来たと思いました。KAGOMEファームについては、お話を担当してくれた方が農福連携について詳しいという訳ではなく、農業寄りのお話を沢山聞かせてくれて、まだ自分は福祉は少し勉強しているが、農業に関しては全く勉強が足りていないので、とても勉強になるお話を沢山聞けて良かったです。最後に、正直この実習のメンバーであまり話したことがない人もいた中、この実習を通して少しは仲良くなれたと感じているので、来年度からの農福連携の授業も学年で困ったことなどがあれば協力して良いソーシャルワーカーになれるよう頑張りたいです。
Dさん	野菜収穫体験では、職員の方から何を育てているのか、どのような品種があるのかなどを聞かせていただき、実際に収穫体験を行うなど様々な活動をさせていただきました。活動を通す前の私は収穫体験をすることに対し楽しめるかなどの、わずかに疑問を抱えていましたが、実際に数ある中からトマトの収穫体験を試させていただくと、先ほどの疑問などなかったような楽しさがそこにはありました。体験したトマトの収穫では4種類、一つ一つが違う固有品種であり、一見して分かる違いがありました、同級生がポソッと発した言葉をお借りしますが、本当に絵に描いたようなトマトや色の違うトマトがあり、どれをみても飽き飽きのしないものばかりで、色々なことを学べたと思います。 これらを通し、私はもっといろんな人にこの体験での楽しさをしって欲しいと思うと同時に、誰でも簡単にできる且つ興味などを持ってもらえるような多様な人々のニーズにも答えられる環境が増えればいいと思いました。また、私の中での大切にすべき視点というのは、『楽しむ』ことや『物事に対する興味、関心』といったことで、今回の視察で仲間と協力しやりがいを感じたことや、何よりも私が心から楽しめていたのを自分自身感じ取ることができて、農福に対しての興味などがとても高まった気がします。今回これらを学ぶことができ、取り組む姿勢などが増え、自己理解を深めていければいいと思っています。この体験で私が楽しめたようにたくさんの方々が、これらの様なことに興味を持ち、協力し地域の活性化や課題に取り組めていければなと思います。	ファクトリーツアーではタブレットを使用した野菜生活の歴史や、使われている野菜生活の材料などについて拝見させていただきました。 ツアーでは子供から大人までおり、年齢関係なく楽しめているのを見て取れました。タブレットなどを用いて子供の興味などを惹きつけ、楽しむといったスタイルはとても魅力的で私自身も楽しむことが出来ました、何よりそこで働いている職員さんは明るく、元気が感じ取れ説明を受けていてこちらまで元気をもらえるほどでした。また、子供から大人まで楽しめることから家族や友人などと一緒に来やすいと考え、色々な人の憩いの場や仲間づくりとしても活用できるとても良い環境とも思います。ツアー見学の中では実際に働いている職員さんなどを見ることもでき、様々な工程を楽しむこともできます。 これらを踏まえ、私が今後この様な活動を行った際には職員さんのように明るく立ち振る舞い、接していけるようになれば良いと思っています。	今回、初めての長野の視察では野菜収穫体験からファクトリーツアーと様々な体験をできました。視察場所について最初に思ったことはなだらかでとても空気のおいしいところだなと印象が強く残っています。綺麗な施設を通り抜ければ一面にひまわりが広がっており、話を聞けば小学生が協力して植えたひまわりだそうです。また、カゴメさんでは収穫体験はもちろん、食事のマナーなども行なっているらしいです。私自身今回の視察は満足のいくものでとても楽しかったですし、なにより知らないことをたくさんしれたのが何よりの収穫です。小学生から高齢者と広い世代の間でも収穫体験などを行ったりできることなど幅広い年齢層で活動できたり、他の方面からの協力など関わりのできやすい環境とも考えられ、農福連携やより広い層の方々に認知され地域の活性化などにも繋がると考えられます。これらを受け今後の勉強の中で農福連携にはどうすればいいかや、より活性化にするにはどうすれば考えていければいいなと思います。

第4項　成果

教育プログラムについて

・「農福連携の実際Ⅰ」では全国において先駆的に農福連携に取り組まれている農業者・福祉事業所・特例子会社などからオンラインでの講義は実際に取り組まれている内容を直接聞く機会となり、理解の向上につながっている。

・フィールドワークでは実際の障害者と関わりながら畑作業や養鶏・野菜販売を通じて農福連携のさまざまな視点から学ぶよい機会となる。

・視察はソーシャルワーカーという立場からどのように農業に関わっていくのか、農福連携とは何かを考えるきっかけとなっている。そして、クラスメイト同士の関係性が深まり、学習に対する意欲が向上する。

今後は3年次のカリキュラム開発の検討をしていく必要がある。

第４章　全体の振り返り　時系列に記載

今年度、取り組みをした日経BPとの会議、農林水産省北海道農政事務所との連携などにつきまして、時系列に報告する。

・7月６日（木）　9:30～10:30　web 会議

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R5 第1回ﾋｱﾘﾝｸﾞ（日経 BP）2023.7.6～議事録

【参加者】

文科省：新川、大塩

日経 BP：高津（議事進行）、高橋

心療校：熊谷校長、飯島学科長、佐藤、幡、酒井

事務局（長井）

≪あいさつ≫

日経 BP（高橋氏）より、前年度の謝辞。今回のﾋｱﾘﾝｸﾞの内容について説明。（以下 2 項目）

①今年度の取り組みの説明、特に昨年度からの違いについて

②今年度のセミナー等のｽｹｼﾞｭｰﾙ感の調整。

≪今年度の取り組み、昨年度からの違いについて≫

【札幌圏域連携授業を説明】幡より

高津氏より

・昨年度に比し、連携高校以外の参加者がいることなど、関連各所の拡がりが見える。

・ハーブを取り入れたのは着想が良い。事業のベースがしっかりとしているのでニーズ（要望）を募って授業に取り組んでも良い。

・KPI 項目が昨年に比べ減っているが、到達しなくても項目を多数上げておけば事業展開しやすくなる。
高橋氏より
・KPI については Goal のための中間目標なので遠慮なく増やしてよい。
・今年度は 6 年事業年度の中間年度にあたり、中間目標を到達できているのか見定める年度。数値的な KPI を多数上げていくと効果判定しやすい。今回で言えば、連携授業関係への参加者が拡大（夜間中学生、道農政部、農園事業者など）したことによって農福連携の啓発に繋がった。等の結果を伝える事ができる。
・逆に参加者が増えない減員や要因について現状分析はあるか。
➡幡：高校教員の積極的な関わりが有効であると感じる。
➡高津：別研究会においても高校教員の関りが重要との報告を受けている。教員向けの啓発講座も有効。各種アンケート項目から抽出すれば、指標になりえる。
文科省より
・今年度は中間期として到達できているか。実証講座の満足度はどうだったのか。これらが重要。

【農福連携 SW コースを説明】飯島より
高津氏より
・オンライン授業の試みでは日経 BP から拝聴した。
・今後のｽｹｼﾞｭｰﾙを共有したい。

【余市圏域連携授業を説明】佐藤より
高津氏より
・余市については定着しているので収穫時期の授業に視察したい。9/12 か 9/15 を目安として検討する。
・余市についても関連各所が拡大している。これも成果として評価できる。

【今年度のｽｹｼﾞｭｰﾙ間のすり合わせ】高津氏より
・ヒアリングについて次回はリクエスト式にするので要望してほしい。3 回目は 12 月の中間報告まとめ時期にしたい。
・別件、外部有識者の個別ヒアリングも予定したい。こちらは改めて連絡する。
・合同会議は今年度の活動について功罪事例について発言してもらいたい。ﾃｰﾏや日程については事務局から後日配信する。
・セミナーについては今年度 1 回のみとして、中間成果報告としてまとめてもらう。1 月末位を予定している。これまでの 3 年間を総括し今後 3 年間の目標立てしてもらいたい。

≪その他≫
文科省より
・昨年度は実践できなかったが、実際場面を視察、あるいは連携授業に web 参加などを検討したい。
西野学園事務局より
・生徒の興味関心は農業、福祉から遠くなっていると感じる。文科省として高専接続事業が主体と思うが、農業や福祉への省庁をまたいでの働きかけをお願いしたい。

以上

・9月8日（金） 農福連携交流会 in 西日本 視察

今回の農福連携交流会 in 西日本の参加者は180名ほど。
事例発表は、株式会社、NPO 法人、行政、一般社団法人の5団体よりそれぞれの立場からこれまでの実践報告と今後の農福連携の取り組みについて報告がなされる。

・基調講演 「農福連携の可能性」について
講師 東海大学 文理融合学部経営学科 教授 濱田 健司 氏
・事例発表 「農福連携の未来」をテーマに5団体から報告
第一報告 株式会社 おおもり農園 代表取締役 大森 一弘 氏
第二報告 NPO 法人 熊本福祉会 理事長 奥野 靖夫 氏
第三報告 NPO 法人 たかつき 事業本部長 石神 裕美子 氏
第四報告 高知県安芸福祉保健所 健康障害課 公文 一也 氏
一般社団法人こうち絆ファーム 代表理事 北村 浩彦 氏

基調講演の濱田教授からはこれまでの農福廉連携の障害者が就労訓練・就労を目的に農業生産を行うことから「農」の部分は林業や水産業・エネルギー産業などに広げ、「福」は高齢者・生活困窮者、生活保護受給者、ひきこもりなどに広げ、更に農福＋α連携について講演される。
また、「農」の新しい価値として収入や働く機会を提供するだけでなく、生きがいづくり、健康づくり、社会参画、レクリエーション・リハビリテーションなどさまざまなサービスを提供することができる。そのため、今後、ゆるやか農業、農的活動が期待される。

事例発表
・第一報告 株式会社 おおもり農園 代表取締役 大森 一弘 氏
農業法人が障害福祉サービス事業所を設立。イチゴを育てている農園である。はじめはイチゴの栽培管理、収穫、パック詰めまでのすべての作業と手順を障害者に指導し、農業者として育てようとしていた。その結果、イチゴ作業をする利用者が少なくなってしまう。これまでの作業の見直しと細分化を実施することに誰にでもできる作業を目指し、障害の特性などを考慮し作業内容を

決め、効率化につなげることができた。そのため、持続可能な農業と福祉との連携に将来性があると考えている。

・第二報告　NPO 法人　熊本福祉会　理事長　奥野　靖夫　氏

就労継続支援 A 型・B 型事業所で農福連携を取り組みにより利用者の気持ちの変化が生まれてきている。

1　農家さんに明日も来いよと言われる「喜び」
2　自分で野菜を育てることができた「達成感」
3　自分で育てた野菜が人に喜ばれる「幸福感」
4　仲間に支えられているという「信頼感」

今後は自主生産（畑を開墾拡大中）、卸先の確保、6次産業（加工品製造）、農業法人の設立などを目指している。

・第三報告　NPO 法人　たかつき　事業本部長　石神　裕美子　氏

高齢者のデイサービスにおいて園芸療法を取り入れいている。目的として生きがいづくり、機能維持・回復としている。そして園芸療法を行うことにより、心が動くそして身体を動かすことにつながり、コミュニケーションツールとなっている。利用者にやりたいことを実践できるよう環境に工夫している。

・第四報告　高知県安芸福祉保健所　　健康障害課　公文　一也　氏
一般社団法人こうち絆ファーム　代表理事　北村　浩彦　氏

農福連携の始まりは自殺予防からの取り組みからであった。高知県は自殺死亡率が全国上位で、県内でも安芸福祉保健所の管内が最も高く、平成26年から自殺予防に力を入れ、保健所が主体となりひきこもりや生活困窮者などを対象に農業を通じて当事者の生活改善につながっていることが分かり、これがきっかけとなり農福連携の始まりであった。平成29年に組織を越えた農福連携を実施、平成30年に安芸市農福連携研究会を設立し令和5年8月現在、農福連携を実践している農家は33か所になる。現在は安芸版農・林・水・商・法・仏・福連携システムとして誰もが安心して自分らしく暮らせるまち＝地域づくりを目指している。

まとめ

今回の農福連携交流会 in 西日本の事例発表は、株式会社、NPO 法人、行政、一般社団法人とそれぞれの立場からの報告がありました。高齢者のデイサービスにおいて日中活動と希望者の利用者に対し積極的に野菜栽培を取り入れているなどの取り組みついて聞けることは大変、有意義である。

他の実践報告からは行政の発信で始められているなどなかなか全国的に珍しい事例であり、行政からの発信においても多くの協力を得るための行動が必要であることを感じた。

・1月15日（月）web 会議

～R5 第 2 回ヒアリング（日経 BP）

【参加者】

文科省：齋藤

日経 BP：高橋（議事進行）

心療校：飯島学科長、佐藤

事務局（長井）

内容：「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」のセミナーに向けて

1月 30 日（火）日経BP主催の「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」のセミナーについての日経BPからの説明と発表内容のポイントについて説明する。

・1月30日（火） 16:00-18:15 web セミナー

テーマ：「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」

主 催：日経 BP

地域活性化のための農福連携人材育成事業の趣旨・目的と実際に取り組んでいる高等学校等と専門学校の連携授業について発表する。

農林水産省北海道農政事務所の HP

本事業を進めていく中で、農林水産省北海道農政事務所様が余市紅志高校の授業へ視察されその内容がホームページへの掲載等された。詳細は下記の通り。

高校、特別支援学校、専門学校が参加する地域資源活用の連携授業が行われました。

北海道余市紅志高校と札幌心療福祉専門学校は、これまでに農業と福祉について連携授業を行っており、ミニトマトの収穫から容器に詰めるまでの作業工程を、誰でもわかりやすく理解できるよう「作業手順書」の作成を進めていました。今回の授業では余市養護学校の高等部の生徒が収穫体験学習を行い、作業手順書をもとにミニトマトを収穫する実践の場となりました。

授業は、3 校の学生と教諭が余市紅志高校の圃場に集合し、自己紹介と作業手順書の説明の後、ビニールハウスに入りミニトマトの収穫を行いました。実の色や形の違いを把握する際など、高校生や専門学生がアドバイスしながら、余市養護学校の高等部の生徒が作業を進めました。

今回の授業体験を基礎として作業手順書の改良が進むことで、来年度以降の農福連携の取組が発展し、特別支援学校から農業分野への就労につながることが期待されます。

【手順書は作業者にわかりやすいよう工夫しました】

【札幌心療福祉専門学校の学生もサポートします】

【収穫したミニトマトを磨き、パック詰めします

第５章　3年間のまとめ

1　令和3年度

「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」が文科省より認可を受けた。この新規事業は本学と連携を行う予定である高校生や福祉施設、農業施設利用者の方々にも大きな効果を与えることを期待されている。特に高校と緊密に連携することにより、高等学校教育と専門学校教育が共に発展することを目指すものである。

令和3年度の本学の具体的な動きとして、令和3年4月に「フィールドワークコース」を開設した。本コースを希望した学生は2年次（令和4年度）から「フィールドワークコース1期生」として、コース特有のカリキュラムの中で学習する。令和4年度は1年生と2年生が「学校行事」という課程の中で体験的に「農福連携」を学習した。（詳細は先に記述した通りである）それに並行しながら、農福連携に関する講座や農業実習の研修など教育課程編成について協議を進めてきた。教育課程を魅力あるものにするため、農福連携の先進的な事例の研究や視察を行った。視察や研究を通し、教職員が到達した考えは「本コースで身に付けるべき知識・技術、育成すべき学生像またそれらを活かすことができる就職先は何か」、いわゆる「入口から出口まで」を貫く教育観を教職員・コーディネーターで共有することが本事業を成功させるうえで欠かせない、というものだった。コーディネーターを招き、頻繁に協議を重ねながら今後6年間のイメージを具体化することに専心した1年であった。

2　令和4年度

令和 4 年度、高専接続連携授業として「北海道余市紅志高校との連携授業」「札幌圏連携授業」を開始した。余市紅志高校へ本学の学生がバスで出向き、高校生と一緒に農福連携を学んだ。余市紅志高校は「総合的な探求の時間」の一つとして本学との連携授業を取り入れた。その具体的な内容と成果については昨年度の報告書に述べた通りである。また、札幌圏連携授業は年間 7 回（土曜日）、主に本学で実施した。札幌大通高校、あいの里高等特別支援学校の生徒と本学の生徒が共に「農福とは何か」を学んだ。この連携授業は高校・専門学校の双方にとって初めての試みであり、初年度は手探り状態での授業展開だったが、実施すること自体に意義があったと捉えている。大通高校ではこの授業を高校の単位として認定するなど、本学の教育を高く評価していただいた。高校の教員と専門学校の教員が協働し教育課程や教育内容を吟味し創り上げるということは、全国的にも例がないであろう。

農福の先進的な事例を学ぶために教員は積極的に研修に参加した。道内はもとより、神奈川県、静岡県、長野県、京都府などを訪れ「農業と福祉」の実際を学び、専門学校としてどのような教育内容が必要とされ、そしてどのような人材を育成すべきかイメージを明確に固めるきっかけとなった。

令和 4 年度は、「フィールドワークコース」の教育課程編成が大きな課題であった。教育内容の吟味、講師の選定、実習先の確保、予算の確保など課題は山積していた。コーディネーター・高校の教員を交え何度も議論を重ね、年度内に教育課程の編成をなんとか終えることができた。令

和 4 年度の高専接続の取組については日経 BP をはじめ多くの関係者から高い評価をいただいた。

3　令和5年度

「フィールドワークコース」を「農福連携ソーシャルワークコース」と改称した。コース選択者は「札幌圏連携授業」（土曜日実施　年 8 回）、「農福連携の実際」、「フィールドワークⅠ」（実習）という多彩なプログラムの中で「農業と福祉の連携」を学んだ。また、「農福」に興味を示した 1 年生と 2 年生が北海道余市紅志高校との連携授業に参加した。夏休みには研修として長野県の「カゴメ野菜生活ファーム」の視察し、学びを深めていった。（参加者 1 年生 4 名、2 年生 1 名）

令和 5 年度内に次年度 3 年生の教育内容を確定する、という課題があった。2 年次で学習した内容をどのように 3 年次での学習に繋げ進化させていくべきか、卒業時までに習得させるべきことは何か、就職先はどのような事業所が考えられるのか等、時間をかけ検討を進め教育内容を確定していった。その詳細は報告書に記述した通りである。

以上簡単ではあるが、3 年間の取組の概要について述べさせていただいた。

【添付資料】

受講後のアンケートのお願い

今回の実証講座の受講ありがとうございます。今回の講座について下記の質問にご回答をお願いします。

1　講義の内容について当てはまるものを選んでください。 *

- ○ 十分理解できるものであった。
- ○ 理解できるものであった。
- ○ 少し理解できるものであった。
- ○ 理解できないものであった。

2　講師の教え方について当てはまるものを選んでください。 *

- ○ 大変、満足した。
- ○ 満足した。
- ○ 少し満足した。
- ○ 普通。

3　資料の内容について当てはまるものを選んでください。 *

- ○ 十分に理解できるものであった。
- ○ 理解できるものであった。
- ○ 少し、理解できるものであった。
- ○ 理解できないものであった。

4　講義の時間の長さについて当てはまるものを選んでください。 *

- ちょうど良い時間であった。
- 少し、長く感じた。
- 少し、短く感じた

5　実証講座を受ける前と比べて知識レベルの変化について当てはまるものを選んでください。 *

- 知識レベルが非常に向上した。
- 知識レベルが向上した。
- 知識レベルが少し、向上した。
- 知識レベルは受講前と変わらない。

6　実証講座を受講して意見・感想などの記載をお願いいたします。 *

記述式テキスト（短文回答）

カゴメ野菜生ファームに参加して（アンケート）

自由記述もいっぱい書いてくれたら嬉しいです。

氏名 *

記述式テキスト（短文回答）

学籍番号 *

記述式テキスト（短文回答）

野菜収穫体験は満足しましたか？ *

- 大変満足した。
- 満足した。
- 満足していない。
- どれともいえない

ファクトリーツアーは満足しましたか？ *

- 大変満足した。
- 満足した。
- 満足していない。
- どれともいえない

今回の視察体験のスケジュール感はどうでしたか？ *

- ちょうどよい
- 詰め込みすぎである
- もっと体験したい

全部の視察・体験をしての満足感はどうでしたか？ *

- ◯ 大変満足した。
- ◯ 満足した。
- ◯ 満足していない。
- ◯ どれともいえない

今回の視察全体と通しての感想やもっとこうして欲しい等の改善点について教えて下さい。 *

令和５年度文部科学省委託事業　専修学校による地域産業中核的人材養成事業
専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証
地域活性化のための農福連携人材育成事業

令和５年度　成果報告書

令和 6 年 3 月 1 日

学校法人西野学園（札幌心療福祉専門学校）
〒064-0822　北海道札幌市中央区北 2 条 20 丁目 2-28
TEL:011-643-8241　　FAX:011-643-8292